随　筆

旅つれづれ

藤田英一*

随筆や随想などは，筆のままとは云っても，読む人を楽しませる必要があるらしいし，想いのままが実は書く人の主張や愁訴をちゃんと含んでいるものらしい。内田百間の名随筆「阿房列車」などは，鉄道旅行の数々の経験を面白おかしく書き連ねているだけのように見えるが，なかなかどうして，国鉄のサービスはどうあるべきとか，旅のマナーを心得よとかを実にさりげなく記している。これは夏目漱石から受け継いだ学識と諧謔味と教師の本性の然らしむる所であろうが，雑文といえども，「文は人なり」で百間の人物が現れているように見える。

本誌の随筆欄を拝見しても，諸先生のお人柄がそれぞれ自ずと滲み出ているようで大変に楽しい。しかし，矢張り理工系の先生の凡真面目さがあって，何か勉強させられているようなところもあるようだ。ところがこんな偉そうなことを言うと，自分の書く番になって，はたと困るのが必定だから，なるべく理工学的なことは避けて，紀行とか文学的なことでも書こうかと思う。しかし，私の旅行はどうせ国際会議や講演旅行だし，文学の素養に乏しいこともすぐ暴露してしまうに違いない。こう話の落ちが判っていながら書くのは蛮勇というもので，これも人柄のうちなのだろうか。えい，ままよ，と言う訳である。

30年来の親友に西独ザールランド大学教授のゴンサー（U. Gonser）がいる。その次ぐらいに親しみを覚えるのはオランダ，グロニンゲン大学（Groningen：喉頭音Gは日本語では書き表わせない）のデ・ワード（H. de Waard）であろうか。昨年(1986)，後者の定年退官を記念して小さな国際シンポジウムが催され，招待されたので，娘を同道，出掛けることにした。最初は「ワイフと来い。」という話だったが，「こちらでどうしても外せない用事がある。」とか何とか一悶着あって，娘が漁夫の利を占めることになった。

7月の上旬，大阪からパリに発った。成田空港のような不便な不愉快な失敗作は利用したくない。まず，ザールにあるゴンサー家に3日間ほど投宿，さて彼のかなり古いメルセデス・ベンツで出発，途中，ミュンスターのこれも旧知のゴンサーの兄や姉のところに寄ってお茶の時間を過ごす。ドイツ人特有の理屈の勝ったおしゃべりになったが，道中は長い，腰を上げてまた車上の人となり，さらに北上，西に国境をよぎり，また北上を続けた。その道筋は地図に点線で示した。

グロニンゲンはオランダ最北部の中心地で，人口10万，水路を廻らした美しい歴史のある街で，物理教室は古い市街地にあり，街並みの中に溶け込んでいる。夕陽の差し込む小ホールに用意されたチーズやワインの顔合せパーティーが旅の後では真に有難い。3年前に訪問したし，2年前には日本に来た人々もあり，見知った連中が多い。日本人はいないと思ったら，既に二三の米国人に混って江崎礼於奈さんがいた。娘は早速，江崎夫人と親しくさせて頂いた。ホテルは一寸，市街地から外れたところ，会議はもっと外側の新しいキャンパスの近代的なホールで行われるので，毎日，バスで往復する。ホテルの窓から眺めると，街の中心部の市役所や教会の尖塔が遠くに見え，周囲は森閑としている。人口密度が世界最大級と言っても，騒がしい日本から来ると，ヨーロッパ中何処でも嘘のように閑散として，時には死に絶えた街のような気がすることさえある。田舎の町でも，イタリア，スペイン，ポルトガルなど，ラテン系の

*藤田英一（Francisco Eiichi FUJITA），大阪大学基礎工学部，物性物理工学科，教授，理学博士，金属物理

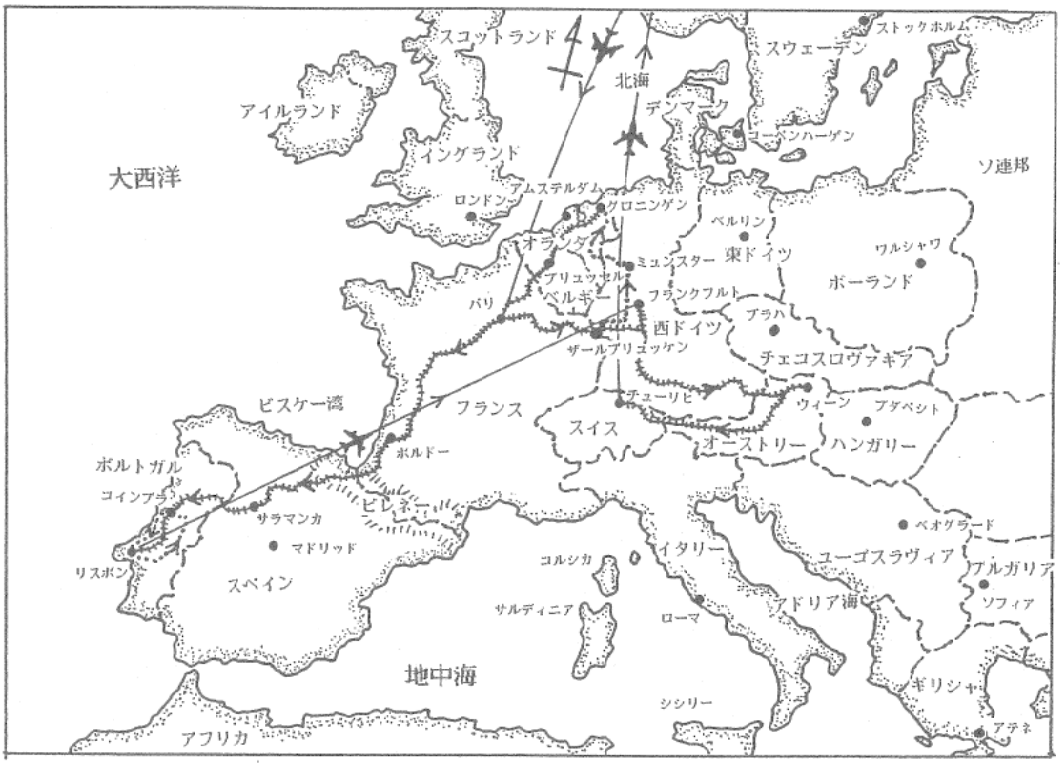

図1

国は例外で，子供が走り，大人は家の前に屯ろして饒舌に時を過ごすさまは，私の育った東南アジアの諸都市と大差ない。オランダとベルギーに棲んだＰ．ブリューゲルの絵には賑やかな人出を画いたものが多いが，16世紀位からヨーロッパ北部の人々の生活形態が変ったのであろうか，何時も不思議に思うことである。

さて会議の内容は非平衡の凝縮系についての研究であるが，詳細に立入る気は毛頭ないのでエピソードだけを二・三記そう，私の話は高圧下の相転移におけるクラスター状態の統計熱力学的理論であったが，質問に立った勇ましいウィーンの理論家が，「相転移現象は本来，電子状態に起因する。それなのに統計熱力学的なやり方で，実験事実をそんなによく説明するとは驚きだ。」と，暗に非難する口調でやってのけた。参会者から失笑が洩れ，私も唖然とした。外国には時々こういう手合いがいる。木を見て森を見ず，である。然しこんな時，徹底的にやっつけるより，軽くいなした方がよい。「そうです貴君が電子論でこれを解いてくれることを期待する。（解けまい！の意）然し昔から相転移は統計力学で沢山扱われ，成功した理論は多い。私は単純明快で成功するやり方を選んだまでです。」と答えた。後で，デ・ワードが，「あの単純な理論と言うのがよかったねえ。」と言ってくれた。彼の娘，アニタは物理の学生で，父親のために会場係りとして，照明にスライドにベルに奔走していた。我が娘は江崎夫人と街の見物やら買物に明け暮れて，ホテルに帰ると，「江崎さん，新婚旅行みたいなものなんですって。画家なんですって。」等々報告が尽きない。遂に，「そんなに根堀り葉堀り開くもんじゃないっ。」と叱ったら，「あら，あちらが勝手にしゃべっていらっしゃるのよ！」

さて，科学以外にも，狭いデ・ワードの家で招待講演者や友人を招んでパーティー，大きなボートに乗って水郷廻り，昔の領主の館で晩さん会とダンス，など盛沢山であった。娘は好奇心の的になり，いやだいやだと逃げ回っていたが，到頭，フロアの真中に引張り出されて，皆様のダンスのお相手。戻って来たら，「あー面白かった。」女というものは永遠に不可解である。

江崎さんの講演は人工格子の考えの発生と，研究の推移を述べたもので，参会者に感銘を与えた。最後に主催者側が特に江崎さんに丁寧なお礼を述べたとき，落ちついて応礼されたのは流石にノーベル賞の貫禄で，私も何だか鼻が高

くなった。江崎さんはレンタル・カーを持っていたので，会場往復にはよく乗せて貰った。ノーベル賞受賞者をお抱えの運転手にしたのは，私だけぐらいではなかろうか。

最後の日は旧知の職員・学生が送別会を開いてくれた。係りのスミット君が，「デ・ワード先生退官記念出版をしますから，何か書いて下さいますか？」というので，暫らく考えて，「オランダでわーどこにも花と水と風」と詠んで中味を説明し，デ・ワードの名前が入っていることを示したら讃歎しきり。しかし，以後オランダ人は俳句と読込み都々逸の区別がつかなくなるかと心配だ。帰国後，この俳句と和歌とその英訳とオランダ風景を色紙に書いて贈ったら記念出版の中の私の分だけ華麗な色刷りにしてくれた。しかし，ここに転載すると，教養高い皆様から色々有難いご教示がありそうだから止めておく。

さて，ユーレイル・パスがあるから，ゴンサーのメルセデス・ベンツに別れを告げて，これから鉄道でリスボンまで講義に出かけることにする。地図で見ても大変な距離だから，ブリュッセルとパリに泊り，後は夜行列車としよう。ところがブリュッセルには連絡がつき，パリの宿も予約したが，リスボンのヴィラール教授には電話が通じない。ピレネーを越えると何とやらで，地の果てみたいだと実感した。電報だけ打って，えいと許りに阿房列車に飛び乗った。

始めは列車も処女の如く従順快適である。暫らく走って，とある小都市に止った。娘が「あら，うちのブリンクホルスト大使の出身の町だわ。」という。彼女はＥＣ日本代表部に勤めている。小さな町から出て刻苦勉励し，最高学府を出て，ヨーロッパ共同体から堂々，大使として派遣されるのは，貴族の血とか家柄が尊重されるヨーロッパ政治の中でのもう一つの人材登用の道だろう。

ブリュッセルに着く直前，車窓から娼家と判る家の窓々に，女が坐ったり立ったりしているのが珍らしく哀しかった。さて駅から電話したら，住友ゴムに勤務の卒業生，家治川彰君が颯爽と現れた。如何に有能な駐在員であるか一目で判る。しかし，生活習慣や政治・教育まで分離してフランス語とフラマン語を使い別けているベルギーでは，彼も言葉に悩まされている。南のフランス側は少しお高く止まっているようなところがあるが，北のフランドル側の方が勤勉・近代的で産業も盛んだ。さて，家治川家に招かれて，アパートの大きなガラス戸から外を見たら，８世紀頃からの修道院と古い町並みの調和が素晴らしいので，思わずスケッチをしたのが図２である。

翌日は家治川家の小さいお嬢ちゃんを入れて５人でワーテルローの古戦場，アフリカ博物館，

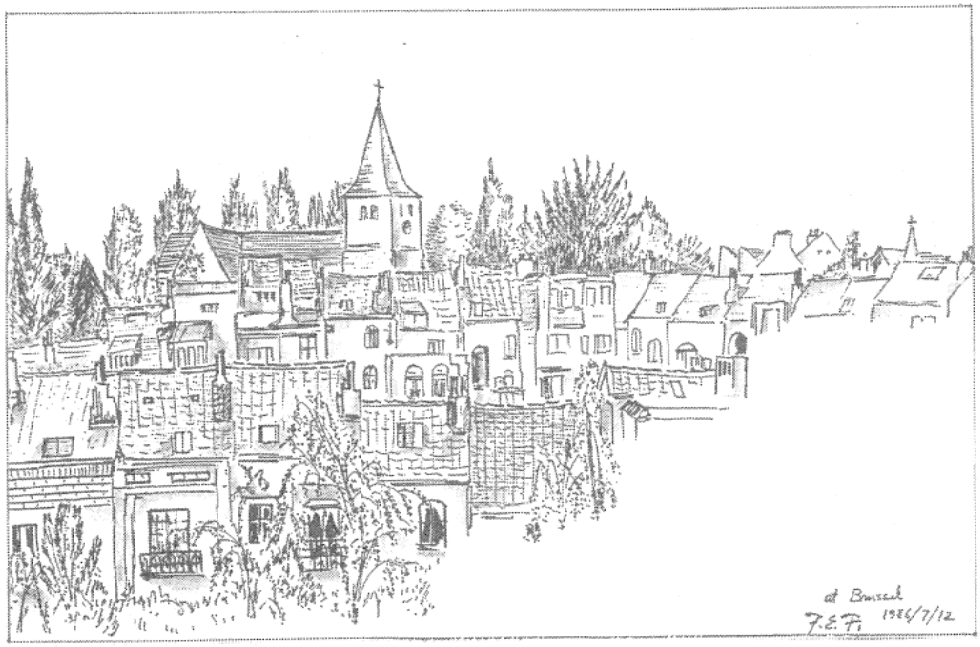

図２

ヴェルサイユ式の宮殿庭園を回って楽しんだ。遊びすぎて遅い列車でパリーに着いて，オーステルリッツ駅近くの宿に行ったら，「部屋はありません。」「だって予約して予約金も払ってあるでしょう。」「それは私は知りません。」「ほらここにブリュッセルからの払込みと依頼状のコピーがある。」「私はマスターから聞いてません。」遂に憤激して言葉が荒くなって来たら，横から娘が「パパはすぐ怒っちゃうから駄目。私に任しといて。」というわけで，しんなりと女性的理屈の交渉で，代りの宿と翌朝のマスターとの予約金取戻しの交渉を約した。パリの安宿の翌朝手分けして娘はまんまと予約金を取戻し，私はリスボン行きの寝台券の入手に奔走したが，入欧以来，求めていた寝台券は手に入らず，そのままリスボン行きの車中の人となった。乗る分だけならユーレイル・パスは何時でも何処でも有効だ。しかし快適さにはさらに努力が必要。

コンパートメントの相棒はオランダ系アメリカ人夫妻で陽気な冗談話しの好きな写真家だ。お互い抱腹絶倒。「オランダならヴィルケンス氏を知ってるでしょう。大阪にも来ましたよ。」と聞いたら，「名前は知ってるけど，僕はそんな有名な写真家じゃないですよ。人生は楽しんでるけどね。」さて列車は肥沃なロアールの野を駈け，葡萄酒天国ボルドーを抜け，ビスケー湾をかすめてピレネーのスペイン領に入る。写真家夫妻ともお別れ。スペイン，ポルトガルは超広軌鉄道なので，列車は乗換え。30分も列に並んで，入国と乗車の手続きをすます。ヨーロッパの北から南に進むにつれて，列車も次第に混んで賑やかになるから不思議だ。学生がどやどやと乗込んでくる。コンパートメントは一杯だ。しかし，この学生達はアメリカなどと違って，一寸人見知りして，やや沈うつで，行儀がよい。日本の学生は，人見知りして，陰気臭いくせにやかましくて，行儀が悪いというところか，などと思っていると，真夜中にサラマンカで汐の引くように下りていった。古い伝統あるサラマンカ大学の誇り高き学生達であった。昔，ウィーンで見たマーラーの喜歌劇（多分唯一のマーラー作），「三人ピントス」の中のサラマンカの学生生活を思い出した。空いたところで，さっさとドアを閉め，カーテンを引き，二人でコンパートメントを占領し，横になる。例の写真家から教わった手だ。お陰でぐっすり寝て，国境を越え，コインブラを通り越し，朝9時，ヴィラール夫妻の出迎えるリスボン中央駅に爽やかな顔で下り立った。丸1日以上の長い旅，2時間以上の遅れなど誰も気にしない。

ポルトガルの講演旅行は快適であった。厚い人情，珍らしい風光，山海の珍味に，学問などは忘れてしまいそうだ。しかし，まずリスボン大学で講義をしなければならない。冒頭，「4百年前に日本に初めて西欧文明をもたらしたのは貴方達です。洋式学校セミナリオを開いたのも貴方の国の宣教団です。その頃，既に，伊東マンショ，原マルチノ，千々岩ミゲルらの少年使節がリスボンに来ました。両国は実に深い関係にあります。（どういう訳か，私は半世紀近い昔に習った少年達の名前を正確かどうかとにかく覚えている。）両国の新しい関係のために，この壇に立つのは無上の光栄であり大きな喜びです。」と述べた。しかし，どのように立派な講義をしたのかはさっぱり覚えていない。リスボンでは阪大原子力工学出身の正法寺延光さんが活躍しておられる。

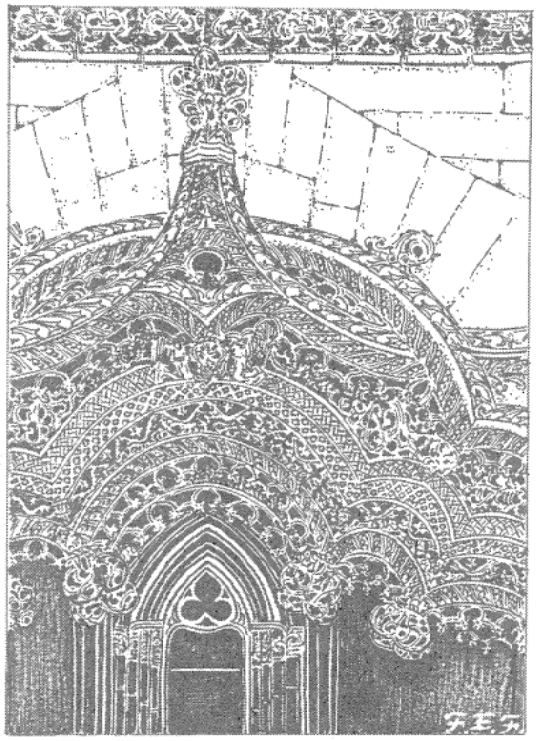

図3

ヴィラール夫妻の車で，名所旧蹟を訪ねながら（地図の点線の如く），コインブラに行き，また講演し，今は大学の所有になっている王朝の宮殿に泊めて貰い，王様の寝台によじ上るのに苦労した。

以下の紀行は説明すると長くなるので，バターリヤの戦勝記念聖堂の未完の部分のスケッチ（図３）と感興の和歌だけを並べる。

王朝の古き館を飛び交ひて
　　つばくろ我になにを語るや

コインブラの王の館に宿りして
　　大宮人の手振り知らなく

バターリヤの成らざる寺のまろき空
　　幾千の燕うずまきて飛ぶ

アルコバサの御堂はかなし王朝の
　　悲恋の棺ふたつならびぬ

漁りするナザレの村のおみなどち
　　黒き衣に憂いつつみつ

海山を越えてファチマに詣ずれば
　　御母マリアは笑み給うなり

欧州を代表する聖性と知性とよばれた聖ヒエロニムス（ジェロニモ）や壮大な夢を持ったエンリケ航海王子について書きたかったが紙数が尽きた。この後，ウィーンとチューリヒに行くのだが，それも割愛する。(図１に経路を示す。)